



Title	「富士のある窓」から「麗わしき母」へ : 少女小説の枠組みの獲得
Author(s)	齊田, 春菜
Citation	層 : 映像と表現, 13, 129-145
Issue Date	2021-03-24
DOI	https://doi.org/10.14943/98061
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81023
Type	departmental bulletin paper
File Information	uji.pdf



「富士のある窓」から「麗わしき母」へ

——少女小説の枠組みの獲得

齊田 春菜

一、はじめに

本稿は、「麗わしき母」(『麗わしき母』一九四七年十二月、偕成社)がどのように「富士のある窓」(『日本少女』一九四三年一〇月～一九四四年三月)から変容したのか考察するものである。

すでに深澤晴美によって「麗わしき母」が「富士のある窓」を改稿したテクストである事実は指摘²されている。また、野口裕子は、「麗わしき母」を「少女小説の枠を超えるものではないとしても、病院の看護婦や事務長、下働きの老人、という人々の会話が生き生きと表現されて」³おり、円地の少女小

説執筆経験を限定的に評価する。さらに倉田容子は、円地の少女小説の傾向として「不幸な境遇に陥った少年少女が正しい心によって幸福を切り拓いていくプロットを特徴」⁴としていると述べる。これらの先行研究は、殆ど顧みられてこなかった円地の少女小説を検討するための示唆に富む指摘である。しかし同時に円地の個別の少女小説についてほぼ考察がなされないままの評価であるという点は留意すべきであろう。

ところで円地は、自作の少女小説についてどのような認識を持っていたのだろうか。興味深いのは、円地が、晩年(一九七〇年前後)のエッセイや小説の中で繰り返し⁵戦後に少女小説を執筆していたと述べている事実である。

ちようど病院に入っているところに、偕成社という児童ものの出版社の人から戦時中に少女雑誌に書いた「朝の花々」という少女小説の単行本になっているのを再販したいという申し込みがあった。私は戦前の作品はいっさい再販しないことにしていたが、少女小説ならいいだろうと思って承諾した。そのころの方ならわりに知っていられると思うが、戦後の数年間、少女小説というものが可成り流行した時代があった。「朝の花々」が縁になって病院から出ると、じきに新しく少女小説を書き下ろしてくれないかという注文が同じ出版社から来た⁶。

「新しく少女小説を書き下ろしてくれないかという注文」で執筆をしたのが「麗わしき母」だと推定できる⁷。円地は、「麗わしき母」を偕成社の注文で書き下ろし、以降少女小説を執筆した。その少女小説は管見の限り、二〇作前後になる。さらに円地は、一九五〇年六月に偕成社から創刊された少女雑誌の『少女サロン』で中心的な書き手として活躍していた⁸。例えば円地は、雑誌の創刊号（一九五〇年六月号）から連載を持ち、廃刊（一九五五年八月号）まで三作の長編連載少女小説を發表し、他に短編小説（少女小説も含む）、紙面上でのマナー講座、少女達との座談会など活動を行っていた。なお円地の少

女小説執筆活動期間は、一九三九年六月に「朝の花々」を『小学六年生』（小学館）に連載してから断続的ではあるが、約二〇年間程だった⁹。その間、円地は、少女小説を書き下ろしたり、少女雑誌や学年誌に長期連載を持っていたりしていた。円地は、これらの少女小説の内容について次のように述べていた。

二百枚ぐらいの小説を書き飛ばすと、それがセンカ紙の粗末な紙に印刷され、美少女の絵の表紙をつけて売られる。定価は百円ぐらいの安い本だったが、二万、三万と売れるので結構当時は生活の助けになった。少女小説などといっても、厳正な意味の児童文学ではない。筋を面白げに組み立てた大衆小説少女版とでも呼びたいものであったが、そのうちの一冊などは五万部ぐらい売れたりして、次々と頼まれるままに三、四年の間に十冊以上も書き散らしたであろうか¹⁰。

円地は自身の少女小説を「筋を面白げに組み立てた大衆小説少女版」と述べている。先行研究でもこの言葉を引き継いでいるものもある¹¹。しかし、「二万、三万と売れ」る少女小説を「書き散らした」事実は、円地が戦略的に少女小説を執筆して

いたと推測できる。

そこで本稿は、円地が「富士のある窓」を「麗わしき母」に書き直した経験によって、当時に流行していた作品群の一つである「母子もの少女小説」の枠組みを獲得したことを明らかにする。しかし、おそらくこれだけでは、円地が他の少女小説作家と変わらない大衆的な作家だという結論になりかねない。実際、円地は「麗わしき母」執筆以降、倉田がまとめたような内容の少女小説を書いたり、大団円で終わる作品を多く執筆したりしている¹²。一方で、円地のいくつかの少女小説は、個々の作品の微細な差異を考察することによってその価値を確認できるものがある。例えば「秋夕夢」（『少女サロン』一九五一年一月、その後『母月夜』一九五四年六月、ポプラ社に所収）と「あほうどり」（『少女』一九五二年三月、その後『母呼鳥』一九五三年六月、ポプラ社に所収）の二作がある。

「秋夕夢」は、すでに論者が別稿¹³で論じたため、詳細は割愛するが、結論を述べると初出の「秋夕夢」のますみの物語は、精神病も治癒し、成長した少女の姿になり、いわゆるハッピーエンディングとして完結する。一方、単行本に収録された物語は、ますみを治療する精神科医の父やますみの成長を描いた章が削除された。つまり初出の「秋夕夢」は、次節で確認する少女の成長という既存の少女小説研究で理解されたイメージが

あったが、削除された章によって少女が成長物語すること／成長しないことという「秋夕夢」の解釈の多様性を引き出すことになった。したがって、初出と単行本の差異は、少女の成長と永遠の少女性といった問題を焙り出すのである。

「あほうどり」¹⁴は、娘と実母の再会が軸となり、次節で検討する「母子もの少女小説」の枠組みを用いている。しかし、物語の構造を分析すると中心が挿話へ移る。この挿話は、円地の他の大人向けの小説として執筆した「信天翁」（『週刊朝日（別冊）』一九五七年一〇月、その後『二枚絵姿』一九五八年四月、講談社に所収）と共鳴する。そして、この関係を検討していくと、「あほうどり」では一切触れられていなかったコールリッジ「老水夫」¹⁵との関係が浮かび上がる。したがって、「あほうどり」は、円地の少女小説と大人向け小説との関係を精査する契機となり得るテキストにほかならない。

すなわち円地の少女小説は、「麗わしき母」で獲得した少女小説の枠組をその後のいくつかの作品で用いつつ、他の要素も入れ込み豊かな物語となる。したがって、円地が「富士のある窓」から「麗わしき母」へと書き直した経験で得た型やその内実を明らかにすることは、必要不可欠な作業であるだろう。なぜなら、今後円地の他の少女小説の具体的な考察やその執筆活動の詳細を考察する上で避けては通れない問題であるからである。

二、少女小説研究における円地文子の位置

円地文子の「富士のある窓」と「麗わしき母」を比較検討する前に、まずは円地が執筆した時期に関係する少女小説や少女小説研究について確認をしていく。

少女小説研究で、西条八十を評価する大橋崇行は「一般に少女小説と言った場合には、『花物語』（一九一六―二六）、『屋根裏の二処女』（一九二〇）などの吉屋信子などに代表されるような、少女たちの友愛関係を描いた作品や、繊細で感傷的な物語を持つ小説群が想起されることが少なくない」とまとめ、これらの作品を「作者―読者共同体に根ざした作品群」¹⁶とした。

大橋は、少女小説研究の整理を試み、そこから逸脱する少女雑誌に掲載された冒険小説や探偵小説を中心に考察する。その具体例として、西条八十が少年向けに書いた作品を改稿し、少女向け冒険小説とした作品に注目した。大橋の研究は、多くの少女小説や少年小説に言及し、そして比較的少女小説研究で見過ごされて来た一九五〇年代における少女小説を具体的に取上げていく。そのため戦後の少女小説を研究する上で重要なものである。ただし、一九五〇年前後に少女小説を執筆した代表的な作家は西条八十だけではない。

例えば本稿で取り上げる円地は、短編、長編を併せて約二〇

作前後の少女小説を執筆している。しかしその多くは、現在の少女小説研究が見落としがちな一九四五年から一九五〇年代後半に集中して書かれている。加えて、一九五〇年代にとられたアンケートで弥吉光長は「しかし現在の少女小説は、吉屋信子や円地文子などが中心となつて書いていたのとは違って、デリケートさを失い、文学性を失い、もはや彼女等の興味を満足させることができなくなつた」¹⁷と述べる。戦前・戦後にも多くの少女小説を執筆していた吉屋信子に対して限られた期間の中でしか執筆していなかった円地が吉屋と同じ基準で少女小説作家として理解されていた。つまり、円地は戦後に「少女小説」を執筆していた代表的な人物達の一人¹⁸として数えられる。

また円地は、売れる「少女小説」を自覚的に書いていたため¹⁹、当時の「少女小説」の大衆受けをするフォーマット（類型・枠組み）を習得し、上手く自作の少女小説の中に組み込んでいたに違いない（円地の少女小説はよく売れていた）²⁰。しかし、これらの円地の少女小説は、前節でも確認したが、円地研究ではごく簡単に概要が紹介されるか、ある特定の作品の一部しか論じられていなかったり、注目されていなかったりしている。

理由はおそらく大きく分けて二つあると考える。一つ目は、現在最も多く円地の作品を収録した『円地文子全集』（一九七七年九月―一九七八年九月、新潮社）に少女小説が未収録で、

さらに年譜からも書誌情報が省略されているからである。これは、円地が全集に収録した作品を「今度の全集に採録したものは私の全作品の三分の二ぐらいであるが、私はある時期に随分書き散らしているので、今度の全集に入れないものは捨てても構わない文反古だと思っている」²¹と説明している。そのため円地の少女小説は、「文反古」というイメージがついてしまったのだろう。これは、一時期円地研究に影響を与えていた²²。

二つ目は、戦後の「少女小説」は、戦前の吉屋信子に代表される『花物語』（一九二〇年）や文庫化（二〇一一年）された川端康成の『乙女の港』（一九三九年）といった「少女小説」あるいは少女文化に比べて研究が進んでいるとは言いがたいからである。戦後の「少女小説」のイメージとしては『ジュニア小説』または氷室冴子などに代表される『コバルト文庫』などが想起されやすい。その一方で、円地が多く少女小説を執筆した時期の少女小説は、あまり注目がなされていない傾向がある。つまり、円地が執筆した少女小説と既存の少女小説研究における成果が上手く噛み合わなかったのではないか。しかし、「麗わしき母」の改稿に着目すれば、現在の少女小説研究にある成果を踏まえ、円地が執筆した少女小説の実体の一部を可視化できるだろう。

例えば少女小説研究の中では、一九四五年から一九五〇年代

にかけての少女小説や少女雑誌が、実際に『赤とんぼ』（一九四六年四月～一九四八年一〇月、実業之日本社）、『銀河』（一九四六年一〇月～一九四九年八月、新潮社）、『少年少女』（一九四八年二月～一九五二年二月、中央公論社）などの戦後のいわゆる良心的児童雑誌を廃刊させる勢いがあつたにもかかわらず、戦後の少女小説の時代を語る時にあまり注目されていない傾向がある²³。しかし、この時期は偕成社やポプラ社などによる少女小説の書き下ろしや戦前の作品のリバイバルなどが流行していた。

このように数少ない戦後の少女小説の研究において、母親と子供の関係を中心に書き、約一九四五年から五五年に流行したと言われている²⁴少女小説（以下「母子もの少女小説」²⁵と記す）には母親像と少女像について、いくつかの先行研究が存在する。

戦後の「母子もの少女小説」の母親像について、堀江あき子は「無償の愛を与えてくれる」²⁶存在、押山美知子は「家庭や家族」²⁷を象徴する人物だと説明する。おそらく、堀江と押山の母親像のジェンダー観の指摘は、当時の「母子もの少女小説」について適切な認識であろう。つまり、戦後の「母子もの少女小説」は、「無償の愛を与えてくれる「母」に代表されるような「保守的なジェンダー観」²⁸を持った作品という一面もあつた。

また久米依子も戦後の少女小説について「戦後は書き下ろしの単行本で刊行される少女小説が増加し「…」それらの作品も母娘愛や少女が生活苦を乗り越えるような話を主とした」²⁹と説明する。つまり、少女小説研究の傾向として一九五〇年前後の少女小説は、「母子もの少女小説」や「少女の成長物語」とされているのではないだろうか。さらに別の角度では「空襲で焼け出され生活や現実に向面せざるを得ない少女たちは、大正ロマン時代のようなモラトリアム期間に浸っていられない境遇に陥っているけれども、女学校や寄宿舎生活、キリスト系の教会など、戦前からの舞台も展開され、少女たちの友情や「エス」感情、貴公子（元華族）への憧れ、宝塚歌劇団への夢などロマンティックな心情は継承されている」³⁰とも言及される。そのため戦前の少女小説で有効であった「少女たちの友情や「エス」感情」は、戦後の少女小説でも重要な要素だと確認できる。

したがって、先行研究で明らかにされた一九五〇年前後の少女小説の特徴は、「母子もの少女小説」、「少女の成長物語」、「少女たちの友情や「エス」感情」と整理できるだろう。そして、次節以降で検討する円地の「富士のある窓」から「麗わしき母」へと改稿されたあたり方は、少女小説研究で明らかにされた少女小説のイメージに合致する。

三、「富士のある窓」から「麗わしき母」へ

円地文子「麗わしき母」は、雑誌の廃刊で未完になっていた「富士のある窓」を改稿し、『麗わしき母』³¹に「えみ子の秘密」と共に収録された作品である。「麗わしき母」の挿絵家は辰巳まさ江であり、「富士のある窓」の挿絵は加藤まさをが手掛けていた。

未完で終わった「富士のある窓」は、菊岡幸子と弟で小児麻痺の後遺症で身体が不自由になってしまった純一を中心とした物語である。ここでは、純一の将来の夢が挫折し、それを克服しようとする様子が語られる。純一は、飛行兵になる夢を持っている。彼の夢について周囲の人々は不可能な事実を知っていたが、純一を傷つけないために、誰もそれを言わなかった。

「富士のある窓」は、六回『日本少女』に掲載されたが、純一の夢が叶わないと、はっきり姉の幸子の口から述べられたのは五回目であった。つまり、純一の将来の夢が挫折してしまう現実を本人に伝えるまで、物語は引き延ばされた。その後、純一はひどく落ち込んでしまう。心配した幸子は、明け方に弟を外へ連れ出し「生きがひのない身体だと思ふなら、二人で死んでしまつてもいい」(一九四四年三月、七八頁)と言う。純一は幸子の言葉を拒絶した。そして純一は医者になり、国のために

役立つ人になる決心をする。幸子は、純一の言葉を聞いて、「赤十字の看護婦を志願して、前線へゆくつもり」（一九四四年三月、七九頁）と純一に伝える。二人は、心配して迎えにきた勘六ちいさんと共に部屋のある加賀病院へと戻っていく。物語は、雑誌廃刊のためここで終わる。

このように「富士のある窓」は、純一の夢が飛行兵であるため、ここから戦時色の強い物語だと言えるだろう。また「富士のある窓」が戦争色の強い、日本の一九四四年前後の時局を織り込んでいる内容は、時代状況、そして雑誌『日本少女』における性格上やむを得なかった。なぜなら、この時期『日本少女』は情報局から干渉を受けていたからである³²。具体的な影響の有無については不明だが、先に指摘した部分以外に例えば、幸子の友人から送られた手紙に「私達は銃後を守る日本の乙女」（一九四四年一月、八〇頁）という言葉が使われている場面がある。つまり、これらの要素によって「富士のある窓」が戦時色の強い時局迎合的な小説として形づくられている³³。

しかし、「富士のある窓」は、雑誌が廃刊となつて中絶を余儀なくされた。その後円地は菊岡姉弟の設定を再び用いて「麗わしき母」を執筆した。この作品について、深澤晴美は「ソプラノ歌手として生きるために家を出る母が描かれ（「麗わしき母」）³⁴と内容について言及している。「麗わしき母」は、深

澤が指摘した「家を出る母」である加賀博士の妻・明子と娘・椿が物語の中心となる。これは、明子と椿が再会するために幸子が奔走し、そして母と娘が会っていた事実を夫で父の加賀博士に知られるまでを描いた物語である。

一見すると別の作品だとも言える両作品だが、共通するエピソード（「富士のある窓」の文章をそのまま引用した部分）も物語に挿入されている。しかし、同じエピソードも扱い方が異なっている。例えば純一の友人・新次郎が、純一の作文を持ち帰り、勘六ちいさんに相談する場面がある。「富士のある窓」では純一が飛行兵になりたいという夢が書かれた作文であり、新次郎は勘六ちいさんにそれを相談した、という内容である。これに對して、「麗わしき母」における純一の作文は、純一が幸子と椿の關係に嫉妬をしている内容であつた。つまり「麗わしき母」で新たに登場した椿によって、幸子（母親代わり）を取り合う純一と椿の關係が構築される。

このように、「富士のある窓」と「麗わしき母」を比較すると、菊岡姉弟を中心に登場人物が踏襲されているが、それぞれの時代設定や物語の主軸は異なっている。「富士のある窓」では菊岡姉弟の話が中心であり戦時色が強い。一方「麗わしき母」では、「母子もの少女小説」の枠組みを用いて加賀家の母娘話を中心に語られる。それに関係する形で菊岡姉弟が描かれ、

幸子と純一の関係に変化（幸子と椿の關係に嫉妬する純一という構図）が起こるのであった。

四、幸子と純一、純一の作文の改変

「麗わしき母」が「母子もの少女小説」の枠組みを持ったために、物語の冒頭から大きく「富士のある窓」とは異なる印象を讀者に与える。それぞれの冒頭の三文を確認する。

【「富士のある窓」】

その日は午前中に大きな手術が二つもあつて院長の回診が午後になつた。二十ほどある病室をまわる間、幸子は年上の看護婦の背後から巻きかへた用具を載せた手押の車を押してついて行つた。院長の加賀博士が整形外科を得意とするので病室には骨折や捻挫のやうなギブスをおかけた患者が多かつた。（一九四三年一〇月、五〇頁）

【「麗わしき母」】

街路樹のわかくしい緑の葉ぶさがやわらかくそよ風にゆすれ、おほりの水のおかるい五月であつた、短いスカートやセルのすそをふきかえすたびに、初夏の匂いが

さわやかにゆきかよつて、若い人たちの顔は一そういきくと輝いて見えた。

帝劇の前には最近帰朝したソプラノの名歌手、笹川明子の名が大きくしるされ、歌劇椿姫の主役にふんそうした明子の美しい写真がかゝげられていた。きょうから十日間、明子はこゝで、その役を演じるのだつた。（五頁）

引用した「富士のある窓」では、院内から物語が始まり、幸子の名前もすぐに語り手によつて語られる。また、この直後に「小児麻痺で手足の動かない四つぐらいの女の子」（一九四三年一〇月、五〇頁）が登場し、キャラメルを自分で取つたというエピソードが続く。そして、小児麻痺の後遺症である幸子の弟・純一の話が彼女から語られる。以上のように「富士のある窓」は、冒頭から菊岡姉弟が物語の中心である。

一方「麗わしき母」では、笹川明子（椿の母、以降明子と記す）の名が語られ、彼女は「ソプラノの名歌手」と記述されている。ここで注目したいのは「椿姫」の役である。数ページ後に「加賀病院の一人娘で、椿」（一一頁）という少女が登場する。後日、明子と椿が母と娘の關係であつた事実が判明する。したがつて、二人の關係は冒頭によつて、その關係が明らかになる役名や名前に対する重なりで、示唆されている。

以上のように、それぞれのテクストの導入部分が全く異なった印象を読者に与えている。そして「麗わしき母」の幸子は、この章（少女のなげき）の中盤に登場し、椿との会話によって弟の純一の名前が話題に上る。話をしている椿は「幸子がだんく好きになって」（一七頁）くる。さらに椿は、母が本当は生きているという秘密を幸子に話したくなる。また、次の章である「母あれど」では、先に引用した「富士のある窓」冒頭の内容が前半に挿入されている。そして章の後半で、幸子は明子が椿の母であること知り、椿に対して「なんとかしてなぐさめてあげたい……」（三三頁）と思う。

続く「よろこびの日」では、幸子と純一の挿話が語られる。実は、「麗わしき母」において幸子と純一のほぼ全てのエピソードが「富士のある窓」からの引用である（ただし、加筆や省略などの多少の変更がある）。ここで確認をしたいのは「富士のある窓」の幸子の希望が「どんなことをしてもこの不仕合せな弟をお国のお役に立つ一人前の人間にしてやりたい……」（一九四三年一〇月、五三頁）と叙述された一文に現れているように、その決心は一切変化しない、一貫した物語の内容だということである。しかし、「麗わしき母」では、椿と明子という新たな登場人物の出現によって、「富士のある窓」の挿話を背負う幸子は葛藤する。

言い換えると「富士のある窓」の幸子と純一の物語を「麗わしき母」で引用したため、幸子にある葛藤はより複雑になり、葛藤は強化される。これは「富士のある窓」の設定を「麗わしき母」でも引き継いだためである。

さらに純一の作文が「富士のある窓」と「麗わしき母」を比較する上で、重要な役割を持つ。それぞれ、前節で指摘したとおり内容が異なる。

【「富士のある窓」】

「おちいさん、僕の心配はこれなんだよ。」

といった。ぢいさんは帳面を取上げたが、難しい字の讀めない悲しさに、目をしょぼくさせて、

「新公、おれに恥をかゝせるもんぢやないぜ。おちいさんの字の讀めねえことはお前だつて知つているだろう。」

「あゝ、そうだつたね。御免よ。」

と新次郎は素直に頭を下げて、

「ぢや話すよ。實は、これ僕の作文ぢやない。純ちゃんのなんだ。」

「へえ、純公の……どうしてその作文をお前が持つてゐるんだ。」

「それはおちいさん、先生が僕にこれを貸して下さつたの

だよ。」

「どういふわけだね。」

と純一の名が出たので、おぢいさんも眞面目な顔になつてたつねた。

「今日、授業が終つた後で、僕先生に呼ばれてね。純ちゃんのことについて色々きかれたんだ。おぢいさん、純ちゃんのやうな身體ぢや、兵隊さんにはなれないんだつてね。」

「うん」

とぢいさんは唸るやうに言つた。

「かはいそうだが、あの身體ぢや兵隊さんにはなれない。」

院長先生もさう言つてゐなかつたよ。」

「…」

「この作文はね、皆の大きくなつて何になるかつて目的を書かせただけど、」(一九四三年二月、八八〜八九頁)

【麗わしき母】

「おじいさん、ぼくのしんぱいはこれなんだよ。」

といつた。じいさんは帳面を取り上げたが、むずかしい字の読めない悲しさに、眼をしょぼしょぼさせて、

「新公、おれに恥をかゝせるもんじやないぜ、おじいさんの字の読めねえことはお前だつて知つているだろう。」

「あゝ、そうだつたね。ごめんよ。」

と新次郎はすなおに頭を下げて、

「じや話すよ。実は、これぼくの作文じやない。純ちゃんのなんだ。」

「へえ、純公の……どうしてその作文をお前が持つているんだ。」

「それはおじいさん、先生がぼくにこれを貸して下さつたのだよ。」

「どういふわけだね。」

と純一の名が出たので、おじいさんもまじめな顔になつてたつねた。

「きよう、授業が終つた後で、ぼく先生に呼ばれてね、純ちゃんのことについて色々きかれたんだ。」

「うん」

とじいさんはうなるように言つた。

「おじいさん、このごろ純ちゃん何だか変だと思わないう？」

「そういつて新次郎は勘六じいさんの顔をみた。」

「そうか……そういえば、少しへんなところもあるな……」

いや、あるとも…大ありだ。」

「…」

「それでこの作文もね、女のことを書いてあるんだよ。」

「女のこと？」

「女の悪口なんだよ。ぼくいま読むからおじいさんきいておくれよ。これは先週、自由課題の作文をつくった時のんだよ。『ぼくの感じていること』って題だよ。」(一二七～一三〇頁)

「富士のある窓」の純一の関心は、将来の夢に特化している。そのため純一の作文は「飛行兵になることをあんまりに一生懸命に書いてゐる」(一九四三年十二月、九〇頁)内容である。なお、純一の認識と幸子や周囲の登場人物達の認識にはずれが生じている。物語は、後半まで純一がそのずれを意識しないまま進行する。幸子は純一に秘密を持ち続けたまま純一に接する。一方「麗わしき母」の純一の作文は、幸子が純一に秘密に椿と会っていた出来事に対して「ぼくの感じていること」(一三〇頁)で「女の悪口」という内容である。作文の内容から純一は、姉である幸子との関係に固執している。言い換えれば「富士のある窓」では姉弟の關係に影響を与える存在が登場しないため、純一の関心は自分自身である。しかし、「麗わしき母」

では純一と幸子の關係に影響を与える椿が存在したため、純一は姉である幸子との關係に関心が向かつていく。

「麗わしき母」は「母子もの少女小説」として読めるが、「富士のある窓」の菊岡姉弟を再び登場させたため、加賀母娘以外の關係にも重点が置かれ、より話は複雑になる。

五、「麗わしき母」の結末

「麗わしき母」は、「少女のなげき」「母あれど」「よろこびの日」「友情の花束」「母の胸に」「姉の手紙」「悲しいひがみ」「春まちて」の全八章で構成されている。母と娘の再会が、五章の「母の胸」で果たされた。したがって六章の「姉の手紙」の物語は、椿と幸子、純一の關係性へに焦点が移る。

例えば、病院の事務長・岡田は、幸子と椿の關係について純一に「まあ、その手紙を見て見ろよ。病院のお嬢さんが…椿さんがよ、お前の姉さんを『お姉さま、お姉さま』って書いていらあ。たぶん、同性愛つていうんだらう。あまつたるくつてよんじやいらねえや」(一一七～一一八頁)と偶然拾った手紙を読み上げる。この岡田の発言によって、少女小説の枠組みの一つである「少女たちの友情や「エス」感情」が「麗わしき母」にパロディとして導入される。そして、この岡田の指摘が

きつかけとなり、純一は「姉さんはぼくよりもあんな生意気なネコつかぶりのやつの方がよほど好きなんだ、なんだいなんだい……病院に用がある、用があるつて、ぼくにかくれてあんな悪魔とあつてだんじやないか」（二二頁）と思つて、幸子と椿の關係に嫉妬する。この嫉妬から、前節で考察した純一の作文へと繋がっていく。そして幸子は純一の態度と作文を見て、苦悩することになる。

なお、この手紙が岡田に拾われる前から幸子は加賀博士の代りに椿のいる別荘に行ったり、椿と明子が再会できるように手伝いをしたりしていた。しかし、幸子は「お手つだい」（六八頁）の意識を持っていたため、純一は幸子が別荘から帰宅後も「あんがい、すなおにみやげの品を喜んだり、高原のはなしをきゝたがつたり」（二〇一頁）していた。したがつて、手紙を拾つた岡田の発言が引き金となつて、疑似的な異性愛（姉と弟という關係）と同性愛を葛藤させる状況になつたのである。それから、純一が椿に危害を与えようとし、物語に大きな影響を与える。

ある日幸子は、「椿さま、わたし近い中、お側をはなれるようになるかもしれませんわ」（一三四頁）と椿に告げた。なぜなら幸子は「昨夜、勘六じいさんから弟のことについているくゝたずねられて、話しあえばあうほど幸子には純一の性格の

変化が自分と椿との友情が原因になつてゐる」（一三五頁）からだと思つてゐる。そのため、幸子は純一が椿への嫉妬から、椿を傷つけないためにも、病院を出ようとする。しかし、その時突然、純一がナイフを持ち二人のいる部屋に入つてきて、暴れ出す。純一が暴れるのを止めるため椿は、明子と会つてゐた事実を全て話した。この話を外で聞いてゐたのが父・加賀博士であつた。加賀博士は「椿、お前の苦しんだことはパパにはよくわかつてゐる……幸子や純一のこと勘六じいやからくわしくきいた……純一も幸子も病院を出る必要はない。何もかもわたしにまかせるがよい。純一」（二四三頁）と三人に告げた。

後日「加賀博士は明子夫人を病院に招じて、椿のためにもう一度加賀家の人になつてくれることをたのんだ」（二四四頁）。その言葉は明子の気持ち動かし「夫の大きな心のゆるしてくれるまゝに椿の母として生れかわろうと決心したの」（二四四頁）であつた。

明子は、仕事のために妻である立場を捨てたが最後には、母・妻というある意味で安定的な、保守的な選択をしようとする。ただし、彼女は仕事で成功し自己実現してから、椿に「帰れるものならわたしも帰りたいわ」（九七頁）と述べていた。実の所、明子は加賀博士に頼まれる前から、家に戻ることを希望してゐた。さらに加賀博士は「わたしはあなたの藝術をそく

ばくしはしない。椿の母ということさえわすれてくれなければ、あなたは舞台上に立つもよし、教授をするもよいでしょう」（一四六頁）と明子に約束する。つまり、明子は加賀博士によつて仕事も妻という立場も手に出来る可能性を約束された。そして語り手は、この明子に対する加賀博士について、「かつての日本の男性にはとうてい出来ないような率直さと、やさしさをもつて言われたのだつた」（二四四頁）と評価する。

後日、幸子と椿は、「アメリカに残した契約」（一四六頁）のため日本を発つ明子を見送るためにホテルへ向かった。幸子は明子に純一の様子を聞かれ「もとのように快活になりました」（二四六頁）と告げる。そして、明子は椿や幸子から純一が医者を目指す夢を聞いた。そこで明子が「わたし達みんなで純一さんをつばなお医者さんにするように骨おりました」（一四七頁）と述べる。また、明子は少女二人に向かつて「……その時までにあなた方も、もつと太つて大きくなつていてね……やせていてはいやよ」（二四八頁）と二人の成長を期待する。

このように、結末で少女や少年の周囲にいる大人は、彼女ら彼らに対して「成長」することを期待し、さらに将来について言及していた。

六、おわりに

「富士のある窓」のエピソードが「麗わしき母」にそのまま活用されたり、一部の挿話が改変されたりする叙述を通して二作を比較できた。この比較によつて、円地の戦後の少女小説の様式の一部を理解できるだろう。つまり、円地は母と娘の和解や再会を軸とする「母子もの少女小説」という枠組みを用いて「麗わしき母」を執筆したのであつた。その中で、円地は「富士のある窓」の菊岡姉弟を再び登場させて「母子もの少女小説」の中心である母と娘の関係から姉と弟の関係へと物語の軸を移動させる。しかし、物語はこの幸子と純一、椿という三人の関係を葛藤させた結果、大団円へと向かう推進力を得る。一方で母である明子が家に戻るという選択は保守的にも見えるが、彼女は仕事で成功して自己実現したうえで、家に戻る。さらに仕事も妻という立場も手に入れる可能性があり、保守的とばかりは言えない。そのため、確かに「麗わしき母」は大団円へと進む「母子もの少女小説」を踏襲しているが、必ずしもその母である明子が保守的な人物だとは描かれないのである。つまり「麗わしき母」は過剰に少女小説的要素を導入したのである。具体的には、戦前の少女小説と戦後の少女小説の融合、保守的な母と自己実現する母、ハッピーエンディングといった

要素を盛り込んでいる。

そしてこのことは、円地が戦後に流行していた少女小説のフォーマットを獲得したとも言え換えられるのではないだろうか。この少女小説の枠組みは、現在の少女小説研究において戦後の少女小説を語る時に指摘される特徴と一部重なる。したがって、円地の少女小説を論じることは、戦後の少女小説研究に寄与するかもしれない。なぜなら、「母子もの少女小説」にも色々なバリエーションがあるからである³⁵。円地の少女小説に着目することは、他の作家達がこの枠組みなどをどのように少女小説に利用したり、しなかったりしたのかを考察する上で足掛かりとなるだろう。

また円地は「麗わしき母」の執筆以降、この枠組みを用いたり、大団円で終わったりする作品を多く執筆する。これらの作品の中には、個々の作品の微細な差異を考察できるものもある。したがって、今後の課題として「麗わしき母」で獲得した枠組みをどのように発展させていったのか。また少女雑誌に連載を持ち長編作品を書き、読者に飽きさせない³⁶。ような工夫をどのように行ったのかなど、検討すべき課題は数多くある。それらに関しては、いずれ稿をあらためて論じたい。

注

- 1 拙稿『研究ノート』『日本少女』総目次と円地文子「富士のある窓」(『日本近代文学会北海道支部会報』二二号、二〇一八年五月)では、「富士のある窓」が掲載された雑誌『日本少女』の総目次や紙面構成などの基礎的な調査を行った。その具体例として「富士のある窓」と「麗わしき母」の簡単な考察を試みた。
- 2 深澤晴美「少女小説」(馬渡憲三郎、高野良知、竹内清己、安田義明編『円地文子事典』二〇一一年四月、鼎書房、三一五頁)。
- 3 野口裕子「円地文子——人と文学」(二〇一〇年十一月、勉誠出版)、八九頁。
- 4 倉田容子「円地文子」(岩淵宏子、菅聡子、久米依子、長谷川啓編『少女小説事典』二〇一五年三月、東京堂出版)、一六頁。
- 5 円地文子・竹西寛子「連載対談② 文壇カムバックの背景」(『円地文子全集 第六巻 月報』一九七七年一〇月、新潮社)、円地文子『四季の記憶』(一九七八年一〇月、文芸春秋)、円地文子『花信』(一九八〇年三月、海竜社)、円地文子『うそ・まこと七十余年』(一九八四年二月、日本経済新聞社)などを参照。
- 6 円地文子『四季の記憶』前掲書、二四頁。
- 7 これまでの研究で一九四七年五月に偕成社から『朝の花々』を再販、次に刊行されたのが『麗わしき母』であることが判明している(参照 陸川享子「円地文子と少女小説」(『書誌調査』一九九三年九月)、

深澤晴美「少女小説」前掲書。

8 堀江あき子『乙女のロマンス手帖』（二〇〇三年九月、河出書房新社）参照。

9 円地は、『少女サロン』の連載を終えてから一時期少女小説の発表頻度が低くなったが、『小学二年生』に一九五九年～一九六〇年まで「ルミ子の青空」を執筆している。

10 円地文子『四季の記憶』前掲書、二五頁。

11 古屋照子『円地文子——妖の文学』（一九九六年八月、沖積舎）、小林富久子『円地文子——ジェンダーで読む作家の生と作品』（二〇〇五年一月、新典社）などを参照。

12 例えば、『三色堇』（一九四八年七月、偕成社）、『谷間の灯』（一九四八年二月、偕成社）や雑誌『少女サロン』（一九五〇年六月～一九五五年七月、偕成社）に長期連載された『荒野の虹』（一九五〇年六月～一九五一年四月、後に『荒野の虹』一九五一年六月、偕成社）、『あの星この花』（一九五二年四月～一九五三年三月、後に『あの星この花』一九五三年四月、偕成社）、『白ゆりの塔』（一九五三年九月～一九五四年三月、後に『白ゆりの塔』一九五四年二月、偕成社）など。

13 拙稿「円地文子「秋夕夢」論—少女小説の観点として—」（『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第一五号、二〇一五年）。

14 このことについて、論者は二〇一九年度日本比較文学会 第八一回

全国大会（二〇一九年六月二六日）で「円地文子「あほうどり」と「信天翁」——コールリッジ「老水夫」との関わりから」と題し、発表を行った。

15 「老水夫」とは、サミュエル・テイラー・コールリッジ（一七七二年～一八三四年）の *The Rime of the Ancient Mariner*（後に *The Ancient Mariner: A Poet's Reverie* と改題）のこと²⁰。ウィリアム・ワーズワスと共に編んだ『抒情民謡集』（一七九八年）の初版の巻頭を飾った詩である。

16 大橋崇行「少女たちの冒険と探偵…西條八十「魔境の二少女」」（『Juncure』第一〇号、二〇一九年三月）、三五頁。

17 弥吉光長「少女の探偵小説愛好に関する女子大学生の意見」（『読書科学』第三卷第三号、一九五九年二月）、三頁。

18 米沢嘉博『戦後少女マンガ史』（二〇〇七年八月、筑摩書房）参照。
19 注5参照。

20 『偕成社五十年の歩み』（一九八七年十一月、偕成社）、小川正治氏語るつくり手から見た少女小説今昔」（『日本児童文学』一九八一年三月）などを参照。

21 円地文子『花信』前掲書、二四頁。

22 例えば、円地研究において注3の野口裕子や、注4の倉田容子らの指摘以前からも、円地が戦後に経済的理由のために数多くの「少女小説」を執筆していたという事実は、研究者の間では比較的良好に

られてはいた。しかしその多くは、円地自身の発言を鵜呑みにし、円地の「少女小説」を「大衆小説少女版」と一括りにし、伝記的な評価しか与えていなかった（参照、古屋照子『円地文子——妖の文学』前掲書、小林富久子『円地文子——ジェンダーで読む作家の生と作品』前掲書、など）。

23 例えば戦後の少女小説は、戦前の少女小説の代表的な作家でもある吉屋信子や川端康成、西条八十（西条八十に限っては注16の大橋崇行に代表される研究者達によって見直しが進められている）などの全集でさえもほとんど収録されていない。ただし、近年この時期の見直しが始まっている。具体的には今田絵里香『少年』『少女』の誕生（二〇一九年一〇月、ミネルヴァ書房）や『少女小説事典』前掲書、などがある。

24 堀江あき子『乙女のロマンス手帳』前掲書、参照。

25 本稿中の引用において「母子もの少女小説」、「母物」、「母子もの」は同一と考え、区別を行っていない。

26 堀江あき子『乙女のロマンス手帳』前掲書、三〇頁。

27 押山美知子『増補版 少女マンガジェンダー表象論——〈男装の少女〉造形とアイデンティティ』（二〇〇七→二〇一三年一月、彩流社）、九〇頁。

28 押山美知子『増補版 少女マンガジェンダー表象論——〈男装の少女〉造形とアイデンティティ』前掲書、九〇頁。

29 久米依子『少女小説』の生成 ジェンダー・ポリテクスの世紀（二〇一三年六月、青弓社）、二九八頁。

30 長谷川啓「敗戦から一九六〇年代へ」（『少女小説事典』前掲書）、（二二）～（二三）頁。

31 一九五二年二月に偕成社から再販されている。

32 『小学館五十年史年表』（小学館社史調査委員会、一九七五年八月）、四二頁。

33 なお本稿で検討を行う「麗わしき母」に改稿される前の「富士のある窓」と同時期に書かれた少女小説のイメージは藤本恵が「境遇の異なる少女が手を取り合い『産業戦士』として働き、弟の代用食研究に尽くしたり」「心身を鍛え、兵士になるべく努力する兄に奉仕する」「行動が重視される」と指摘している。（藤本恵「戦時下の少女小説——敵対者の消滅」〈菅聡子編『少女小説』ワンダーランド——明治から平成まで』、二〇〇八年七月、明治書院、六三頁）したがって、戦時色が強い傾向のある作品が多かったことが推測できる。

34 深澤晴美「少女小説」前掲書、三一六頁。

35 例えば、川上喜久子「山茶花の家」（『少女の友』一九五〇年一月）の山村冬子は、父（音楽家）と母、妹と暮らしている。冬子は、母との間に血の繋がりが無いが、そのことを知らない。ある日、冬子は近所の山茶花の垣根がある家の庭先で声楽家の西川珠子に声をか

けられる。それ以来二人は、庭先で会っていた。実は、珠子が冬子の実母であったが、彼女は事実を冬子に明かさず、ピアノを贈った後、渡米し娘の前から姿を消した。このように、娘が事実を知らずに、実母と別れる物語もある。

36 『少女サロン』には、読者達の投稿と編集者のコメントで構成されている「サロンフレンド」というコーナーがある。そこで、円地の少女小説について読者たちが期待していると思われる感想をいくつか確認することができる。例えば「――略――七月号さっそく読みましたわ、荒野の虹ナイスだわ、私いっぺんに留美さんと美保さん好きになっちゃった早く次が読みたいわ。大至急八月号を出してネ、おねがいよ、バイバイ」（兵庫県、飛田とよ子「サロンフレンド」『少女サロン』一九五〇年七月）、「……」少女サロン実ナイスだわ「死神の馬車」犯人は誰かしら「荒野の虹」どうして美穂のお母さまは狂気のように笑うのかしら次号がまちどおしいわ、高木先生、円地先生ありがとうございます。「……」（群馬県、北村たか子「サロンフレンド」『少女サロン』一九五〇年一〇月）など。また『少女サロン』の紙面上の座談会の中で出席者の少女の一人（宮崎秀子）に「あの、先生のおきになつてらっしゃる『白百合の塔』のさいごはどうなるんですか」（座談会 少女時代の夢を語る（円地文子先生をかこんで）『少女サロン』一九五四年四月）と質問されている。

【付記】

円地文子「富士のある窓」の引用は、『日本少女』（一九四三年一月～一九四四年三月）によった。また、円地文子「麗わしき母」の引用は、『麗わしき母』（一九四七年二月、偕成社）によった。なお、引用文中の傍線は、引用者が付けたものである。